

The new day

崎本 智 (6)

○紋章の竜

トーマス・エミリオンテは復活祭の朝に翼竜を見た。生まれて初めて見る翼竜はとても大きく、トーマスが想像していたスケールをはるかにしのぐものだった。翼竜と言ってもプテラノドンのような実在の生物ではなく、いまそこにあるのは1066年ノルマンディ公ウィリアムによるイングランド征服の物語に象徴として出てくるワイバーンのことである。

「バイユーのタペストリーに刺繍されてあったね」と父が言った。

「イングランド軍の軍旗として描かれていたわ」と母が言った。

翼竜の体には無数の「しわ」が刻まれており、星霜を重ねて生きてきたことがわかった。リヴァプールにある海岸沿いの曇り空の草原で僕たちはピクニックのようなことをしていた。家具屋がしまっていたから僕の新しい机を買うことができず、僕は浮かぬ顔をしていた。そんな顔をざらざらした舌でべろりとワイバーンはなめてくれた。

母は冷蔵庫のような無表情な顔をしていた。父は母のご機嫌をとるように昔訪れたさまざまな外国の話をはじめた。それらの目的のない旅に母も同行していたようで、母は灰色の荒れた海を瞳に映しながら、表情を崩して「懐かしいわね」と一言いった。

僕は置いてけぼりにされたようだったが気が楽だった。白いfrisbeeをクルマの中からとってきて、僕はワイバーンにじっくりと見せた。ワイバーンの瞳も母と同じくらい生彩をなくしたガラス玉のように虚無に支配されていた。瞼にはやはり年輪のような「しわ」が刻まれている。歳をとるということはこうやって灰色になっていくことを受けとめていくことなのだろうか。僕は薄墨色の雲に気分を圧迫されながらため息をついた。

ワイバーンがコウモリのような翼をばたばたさせて草原に塵芥が飛び散る。風を正面から受けた僕は面食らって仰向けに倒れこんでしまう。どこかで鈍いホルンの音が聞こえている。演奏者は音の調節をしているのだろうか。メロディを遠ざけたまま、ブオオオンと物質的な音だけが風にのって響きわたる。ワイバーンは不意に空へ飛び去ってしまう。

灰色の海に向かって白いfrisbeeを投げた。ワイバーンが炎をふいてfrisbeeを焼きつくしてしまうことを期待した。でもfrisbeeは王冠のような水しぶきをわずかに立てただけだった。僕は風にのった塵芥を吸い込んで長い咳をした。

○曜日感覚

まっさらのシャツにボンゴレ・ロッセのトマトソースがついてしまう日曜日、葉巻を吸い紫

色の煙をくゆらせるのはドン・カルネデス、追跡はまだ始まったばかり。だれもがああ平和な午後を境にして、変ってしまった。カルネデスに関わったばかりに追跡者たちは幽閉され、競売はついにカルネデスの思うつぼになってしまう。

僕はある雨降りの月曜日、タクシーを止めようとしている韓国人女性を見つける。彼女の名前はルーシー。愛称なのか本名なのかわからないけど話しかけた途端に、名前を名乗ってくれた。ルーシーは夜の街のひかりのなかを泳いでいく。車道をよこぎってみずたまりを踏み、ひかりが弾けていく。靴を汚すこともためらわない。僕はルーシーから次の競売場所の地図を手のひらに託される。ルーシーはまたひかりのなかへ消えていく。

水曜日の朝。都会にそびえる森を歩きだす。孤独になって最初から考え直したかった。最善の手が僕にもまだあるのかを。それなのに、思いだすのは地図を受け取る時に触れたルーシーの肌の冷たさばかり。グレートマリオンパークは森閑とした空気を湛えている。けれど煙草を買うためにちょっと公園を出て、路地を歩くともう雑踏に追い付かれてしまう。僕はカルネデスの部下たちが周りにいないか確かめる。少しずつ朝は時間と共に街に溶けだしていく。薄い雲の隙間から朝焼けのひかりが街にこぼれていく。

<カルネデス氏、心不全のため死去>。「モナリザ」が夜の街に微笑むのを見ながら僕は電光掲示板にその文字をみつけた。クラクションの音がひっきりなしに聴こえる。耳障りな不快な音。テールランプが明滅しながら、限りない数の車が目の前を走り去っていく。カルネデスが死んだ。僕の唯一の目的はいま消えたのかもしれない。明日、再び日曜日の競売が始まろうとしているのに。

レヴィ氏が管理しているムトロリタという場所で競売は始まった。もうだれも時間を巻き戻すことはできない。鉄柵の扉は開かれて、世界の富豪たちはローマ神殿風に造られた建物のなかへ案内されていく。赫い絨毯が血で染まっていることに、馬鹿な金持ちたちはだれも気がつかない。ふいに僕は自分のシャツに赫いしみができていることに気が付いた。血？いや、違うボンゴレ・ロツソのトマトソースが洗濯しても落ちなかったのだ。

○三つ折りの時間

三日月をあたまたに宿らせた三人の紳士がそれぞれ南西と北東と南を向きながら、宵闇の公園に立ち尽くしていた。道標の矢印のようにそれぞれの方角を向いたまま、視線をそらすことはなかった。つい先週まで傀儡政権に対するデモがあちこちの通りで、止むことのない怒号と共に響いていた——この街で三人のように黙って何かを訴えるという光景は、偶然それを見てしまった人にとって異様だったのかもしれない。アリス・カニンガムは高校のチア

リーディングの早朝練習の時に三日月の三人の紳士を見かけた。藍色の空が地平からうっすらと白んでくる時間に大人が呆然と立ち尽くしているなんて、宗教の儀式だろうかと頭の片隅で考えながら、次に見える風景に意識は攪拌されていき三人の紳士のことはすぐに忘れてしまっていた。

アリス・カニングムの視線が離れたすぐ後で、南西を向いた紳士は人差し指を立てながら時計回りにまわって北を指した。その数秒後に北東を向いた紳士も人差し指を立てながら反時計回りに北を指した。南を向いていた紳士は兵隊のようにくるとターンして、(それが時計回りだったか反時計回りだったかはあまりにも早すぎて分からなかった)、北を向いて両手をひろげた。次の瞬間、ハンボソミズナギドリの大群が公園の林から飛び立ち、三人の紳士を糞まみれにしてしまった！

○窯あとの時代

葉脈をつたってながれてきた水滴が鼻に落ちて、古びた窯あとの傍で眠ることはもう止めにしようと思った。雨上がりのヒュルトゲンの森の入り口によく虹がかかっていた。まだ新しい馬車の軌跡をたどって森の中を散策することがわたしにとって物事を思考するときの習慣だった。道標はなんでもよかったし、それにこだわることもなかった。気まぐれにみつけたこのあばら家の窯あとを気に入っていて、訪れたのは今回が初めてではない。

姪のクラリッサを今度連れてきてもいいと思っていた。この森は比較的最近まで陶器が焼かれていたのだろう。陶器の破片があちこちに散らばっていた。体内の時間がいつもよりも正常にながれているような気がしてここでは一層眠たくなることが多かったから、何かの目的でそこに置かれた平たい石の上に身体を横にして眠ることがあった。春の森はまだ寒く、起きると肌が土のように冷たいことがあった。こんなところで眠るのはよくない——そう自分に言い聞かせながら膜がはったような森の空気にため息を混ぜる。

そこへ一息に夜が訪れるように大きなローブがあたまからかけられる。綿ビロードの柔らかい生地が肌になじんだ。目の前にいる少女が被せてくれた。少女をみつめているはずなのに老婆をみつめているような気がした。背丈は小さいのにそれは遠近法によってゆがめられていて本当はわたしの倍の身長を持っているように思えた。視界が鮮明になっていく途中その顔は誰かに似ている気がした。

「ヒュルトゲンの森に魔女が住んでいたとしたら、第二次大戦の時にはどうしていたんですか」

わたしの口を借りてわたしではない誰かが質問を投げかけたような気がした。暖かい沈黙がながれて、それから夕立が降り始めた。太陽は雲の隙間から顔を出しているのか、やけに

明るい雨だった。沈黙を守ったまま、少女は窓の向こうの木枝に飛んでやがて翳になり、ひかりになって虹になったのかもしれない。

小さな虫が平たい石の上を這っていて、片目だけでそれをみつめながらわたしは過去に遡っていくような感覚に見舞われた。淡い意識のなかでそんな愚かなことを考えながら虫の歩行を眺めていた。けれどあの水滴が鼻がしらをうったから、もはやここに留まるべきでもないだろうとわたしは決意する。穴の開いた屋根から青空が見える。腐植土の冷たい匂いが漂ってきた。とうぜん六十年前の戦争で使われた火薬の匂いはその森から消滅していた。慰霊碑を訪れたこともあったけれど、それは何かを象徴することにはあるにせよ、新しい意味は何も生み出さないことは明らかで刹那にわたしの印象からは消えていった。あばら家はすでに蔓にからまれ針葉樹林の枝におおわれて、もう森の一部と化していた。けれども水の出どころはつかめない。

あのとき、鼻のあたりに落ちてきたのは屋根伝いの雨漏りの水であろうはずなのに、意識がはっきりとしないままにわたしはそれを葉脈の太い線をつたってながれてきた時間を超えた水ではないかと予感した。根拠もないまま辺りを見回してみても、やはりそれらしい大きな葉っぱはみられない。魔女も昔のまま生きることができれば、よかったのに。

○脈拍

銃口がエレノアの背中に押し付けられたとき、岸に帆船が漂着した合図として鐘楼が鳴り響いた。その船に手紙があるかどうかエレノアはそわそわしながら、強盗の幼馴染にむかって「ワインでも飲まない？」と声をかけてみた。グスタフ・ムーデオは昨日から何もかもが上手くいかなかった。いや、生まれてから上手くことが運んだ試しなどないのかもしれない。昨日、旅行者向けの雑貨店で強盗をしようとしたのに激しい腹痛に見舞われて結局、トイレを借りただけで、店の金に手をつけることはできなかった。

グスタフも幼馴染のエレノアから金を巻き上げることなんかはしたくはない。ただ、この町から一刻も早く出なければならない理由から、強盗の相手をえり好みしている場合ではなかった。偶然、選んだ家がまさか幼馴染が結婚して立てた新居だったなんてことになるうとは、覆面をしていてもエレノアはクスクスと笑いだして、すべてを冗談のような空気に変えてしまいそうだった。グスタフは仕方なく荷造り用のロープでエレノアの両手を後ろ手にしばって、古美術商の叔父から買った小銃を背中に押し付けた。エレノアは殺されるかもしれないとは全く思わなかった。

「銃を向けられて恐くないと思ったのは今日が初めてかもしれないわ」

「どうしてお前がここにいるんだ。なぜいつもじゃまをする？」

「意識している人間は目の前に現れやすいものかもしれない」

「馬鹿なことを言う。俺はお前に未練など少しも持っていない」

「あの村で子どもといえば、あなたとわたしぐらいしかいなかったから学校に行くまではいつも遊んでいたわね。いまでも土をいじるとあの時の幼い記憶がよみがえってくる」

「しゃべるのはもうよしてくれ。俺は未来のことを考えているんだ。過去のつまらない、金にならない話は嫌いだ」

「時間の向かう先は過去にあるのかもしれないわ。むしろ潜り抜けてきたのは幾つもの分岐点を持つ未来の方」

「お前のそういう話し方、昔から苦手なんだよ」

「わたしは手紙を待っているの。昔、約束した手紙がやってこないかっていつも期待の連続。船が岸についたら手紙を積んでいないか確認をしているのよ。外国で絵を書いて暮らせるようになったら、いつか僕の家を招待するって言ってくれた幼馴染がいたの。その子から手紙が来ないかなって過去とも未来ともつかない時間を眺めながら、手紙を待ち続けているの」

「……絵はもうやめたんだよ……古い傷に塩を塗り込むのはよしてくれ」

「いま、目の前にいる強盗はわたしの知っている人ではないはずだわ。だってこんなことしなくたってあの人は世界と向き合う方法がキャンパスを通してわかっているはずだもの。……もうわたしも話すのには飽きたわ」

銃声が響いてテーブルの上にあったワイン瓶が粉々に砕けた。血よりも鮮やかな緋色が絨毯を同色に染めながら円状にひろがっていく。時が止まるような心地がした。

○水車

やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語を、どこかで聞いた記憶があってそれを誰に聞いても腑に落ちるものがなく、小アジアを旅してわたしは蕭条たる土地をいくつも巡り歩いていた。石に刻まれた物語。演じつづけられて継承された物語。布を縫い合わせてつくられた物語。わたしはありとあらゆる物を読みふけり、夜も眠らずにただ、やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語を探し求めた。

堀の深い顔をした少女が籠をあたまにのせて、硬いパンのようなものを売っていた。わたしは穴のあいた鞆から上手く財布をとりだして、銀貨を渡した。暴落した銀貨の価値はこのような田舎にも伝わっていたが少女は嫌な顔をせず、食べ物を分けてくれた。山羊の乳も買いませんか？ と少女がわたしに尋ねてきて、わたしはまた銀貨とそれを交換してもらった。道端の石に腰を下ろした少女は同じように山羊の乳と一緒にパンを食べ始めて、真昼の乾いた風に髪をなびかせて眩しいような表情をしていた。

「ここらあたりには古い城壁が見られるけど、これは城跡か何かなのかい」

砂を孕んだ風がまた強く吹き始める。風が止むと同時に少女は口をひらいた。

「あたしもよく知らないんですが、農場のようです。寂しい感じのところですけど」

少女はスカーフを上着の胸ポケットから取り出して口を覆い隠した。

目鼻立ちはとても端正で美しかった。やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語に彼女のような登場人物がいたような気さえする。枯草が大風に吹き上がり、城壁のなかにいるであろう動物たちの声がわずかに聞こえた。

「あれは何の声？」

遠景にこころを奪われたような表情をして沈黙を含んだ声で彼女は応えた。

「羊でしょう。羊飼いが何十頭も連れて山から下りてきたんでしょう」

地平の彼方から吹いた風が山羊の鳴き声を届かせて、わたしは風をまともにもうけてしまい情けなくも尻もちをついてしまった。何もない平原が回るように鮮やかに世界が反転してわたしはふいに巨大な雲の真下に白い人工的な小山を見つけることができた。どうしてそれに気が付かなかったのか。小川の水がその白い山に集中するように敷かれており、わたしは暫くそれをみつめることを止めなかった。ふいに風景が微かに滲む。……

瞼から水が溢れてくる。充溢された何かがわたしの血をめぐっているのかもしれない。幼いころに亡くなった姉がわたしの前を通っていくような気がした。……少女はわたしの変化に気が付いていたけれど目を細めたきり、やはり風に髪をなびかせてそれを結わえようともせずに小さく歌を歌っていた。……わたしはその異国の言葉に姉が持っていたさまざまな小物を思い出して泣いた。やがて風は止み、白い小山が陽炎のなかに揺らめいて、あれも近づけば離れていく幻覚かもしれないと、四方から聞こえる水の音に耳を澄ませた。

○鏡

ヘンドリック＝モンフォールはモンフォール家の嫡男であり、世間ではスパスパスパパンティック王子と仇名されていた。スパンティックという言葉はこのあたりのある意味を示す方言で、ヘンドリックが街を通るたびに家々は窓をしめて、家長はスパスパスパパンティック、スパスパスパスパ……と言い、子供たちもスパスパスパスパ、九官鳥もスパスパスパスパと言ってどっと笑いあっていた。隣国で暮らしていて、貴族会議の席が一席空いたため召集され、この土地に来たヘンドリックにとってスパスパスパパンティックという言葉の意味には見当もつかず、いつも不愉快な思いをしていた。

「お母様……お恥ずかしいのですがスパスパスパパンティックというのはいかなる意味を持つのでしょうか」

と実母にヘンドリックが尋ねると、母のマリア＝モンフォールはたまらずジャガイモのスープを吐き出してテーブルをびしょびしょにして、イヒイヒイヒイヒといって床に笑い転げてしまった。実母の無様な姿を見るに堪えないヘンドリックは馬に乗って、ハーメス家を訪れた。ここには婚約者たるジョアンが暮らしていて、ヘンドリックは昵懇の仲にある召使たちを通して屋敷に入り、鏡の前にやってきた。そういえば家を出る前に身だしなみを整

えてくるのを忘れてしまったから、せめて鏡ぐらいはと思って自分の顔を覗き込むとそれはまさにスパスパスパパンティックと形容したくなるようなみずからの顔と向き合う羽目になる。頬が赤らんだ成人したキノピオのような自分の顔が映り、わずかでも自分の顔に自信をもっていたのを情けなく思った。階上ではピアノソナタが演奏されていておそらくそれはジョアンが弾いているにちがいない。スパスパスパ……。こんなところにいたらスパスパスパスパ……。ますますスパスパスパパンティックと呼ばれてしまうとヘンドリックは焦り、抜き足差し足で元来た道を引き返す。そのとき、ピアノの演奏が急に止まり、階段をせわしく下りてくる音がする。ジョアンがやってくる。ジョアンがやってくる。気が付いたらヘンドリックはスパスパスパスパスパという言葉が無意識にこぼれていて、ジョアンの前でスパスパスパパンティックと叫んでしまった。ジョアンは大笑いをしながらヘンドリックの顔に平手打ちを食らわせて、ヘンドリックは卒倒してしまう。ジョアンは自室に連れていき、ヘンドリックの顔に烏の面をかぶせた。以来、十年、ヘンドリックはジョアンの屋敷で烏として暮らし、再び面をとったときに、二人の婚礼の儀式は何のひやかしもなく厳粛に執り行われた。

○野放図な部屋

髪型はマッシュボブの女王がセシル・ハート。その静かな部屋に一人佇んでいて誰もいないのに一言つぶやいては、窓から入ってくる陽光をにらんで眩しそうに眉をよせた。何を映しているのか分からない、スロウな瞳の動き。部屋に入ってきたばかりの少年は一瞬戸惑った。例のバンドマンたちは隣室で食事をとっていた。部屋の中央にあるトーストとベーコンエッグにミルクがのっていたから、この女にも同じメニューが用意されていた。

「あなたがスペードなのかしら」とセシルは少年の方を一瞥もせずに声をかけた。太陽の光は明るい場所をつくと同時にはっきりと暗闇を作り出していた。彼女はその光と暗闇の境界に位置して椅子に腰を下ろしていた。

「わかりません。でも僕は自分の意思でここに来ることができました」

「戦争はもう終わりそうかしら。わたしは部屋から出ないから分からないわ」

「ここに来る途中小さな雑貨屋に寄ったんですが『ミルトビューン』紙にはもう【終結の兆し】という見出しがありました」

「あの新聞社はあたまのいかれた連中ばかりだから信じない方がいいわ」

「国境で戦闘は行われているんですよね」

「自然国境説なんて馬鹿げているわ。大時代な考え方……」

セシル・ハートはグラスにオレンジジュースを注いでくれた。乱暴に注がれる橙色の液体。透明なグラスの中に閉じ込められた果汁。どこかで似たような光景を見たことがある気がした。ステレオから流れるピアノジャズの音量はかなり小さかった。やがて隣室のバンドマンたちも、それぞれの楽器の音階の調整に入る。隣の部屋からは間の抜けた音が聴こえてく

る。彼女は部屋のカーテンをさっと閉めた。

クシャクシャにまるめられた原稿用紙がいくつか屑籠に捨てられていて、彼女が何か文章を書いていることが推測された。窓の外には大きな灰色の雲が横たわっていてパレードの長い列が続いている。それは滑稽にしか見えなかった。また既視感が押し寄せてくる。貝殻の破片のような真昼の月が雲の間から見えて、セシルにそれを伝えても彼女はそれを見ずに、瞳をゆっくりと動かしながら細部にわたって彼女の記憶している亡命していた国のことを話しつづける。オレンジジュースを飲みほした少年は紙ナプキンできれいに拭き、セシルに返した。彼女は窓辺に置いてあった色とりどりのルピナスにグラスで水をやった後、ワインをついで半分ほど飲み干した。

とつぜん世界に色彩が溢れるような音楽が隣室から奏でられてそれは一定のメロディによらず、おたがいの音と音——くんずほぐれつの——の素晴らしい残酷さに満ちた氾濫。バンドマンたちのセッションは静かな部屋の二人のこと置き去りにして忘れ去るような陽気さに満ちて、それはある種の優しさにも感じられた。騒音が蹂躪する空間で彼女の声を聞き取れるのはスピードと呼ばれた少年だけだったろう。どんな盗聴器にも拾えない微かな皮膚の呼吸のようなその声が耳殻のなかに入り込んでいく。それは痕跡を残さないここにしかない会話だった。

彼女は亡命していた国で起きたさまざまな出来事を話していくうちに少し落ち着いたのか姿勢を崩して、目を閉じた。この部屋に戻ってこないことはセシルもわかっていたのかもしれない。ルピナスの水やりは誰がやるのだろう。通りのパレードはすっかり終わり、喧噪のあとの静かな胸騒ぎが誰かの気分として宿り始めるころ街灯や商店のネオンが灯されていく。憂色を隠せない少年は静かに自分の名前を名乗り、礼をして、セシルを抱き、その部屋を去る。ルピナスは月明かりに照らされて小さく窓辺で鎮座していた。

(了)